東洋史研究

第六十四卷 第三號 平成十七年十二月發行

記憶される西周史

—— 逡盤銘の解讀 ——

松 井 嘉 徳

はじめに

第一章 二つの王統譜

第二章 単一族の系譜

第三章 康王 獨尊

第四章 周王の記憶

おわりに

はじめに

457

二〇〇三年一月一九日、陝西省寶鶏市眉縣楊家村の窖穴から二七件の青銅器が出土した。⁽¹⁾ 鼎一二・鬲九・方壺二・盤一・盃一・匜一・盂一からなるこの青銅器群にはすべて銘文が備わっており、なかでも四十二年逡鼎(二件)・四十三年逡鼎(二〇件)・逡盤(一件)と名づけられた青銅器には、それぞれ二八一字・三一六字・三七二字という西周期屈指の長

銘が刻されていた。三七二字からなる迷盤銘は、「迷曰く」との書きだして始まる自述型式の前半部分と、「王若く曰く」で始まる册命儀禮を記録した後半部分からなるが、その前半部分は、皇高祖單公から始まる迷の祖先たちが歴代周王に仕えてきたことを記す極めて異例な内容となっている。銘文が言及する周王は、文王・武王・成王・康王・昭王・穆王・共王・懿王・孝王（孝王）・僖王（夷王）・刺王（厲王）の一一王と、迷が仕える「天子」の計一二王で、この「天子」が宣王を指すことは疑いない。迷盤と共に出土した四十二年逯鼎「四十又二年五月既生霸乙卯」と四十三年逯鼎「四十又三年六月既生霸丁亥」の二つの紀時もまた、宣王の在位年数を四六年と傳える文獻史料と矛盾しない⁽²⁾。

文王から數えれば、紀元前七七一年の幽王の滅亡まで、西周王朝には一三人の王が在位したことになる。この間、第八代懿王の死後、懿王の父共王の弟孝王が即位し、その死後には懿王の太子であった夷王が即位するという王位繼承の混乱があったことを『史記』は傳えており、それに従えば、文王から幽王までは一二世代となる。迷盤銘は、この一二世代・一三王のうち、現「天子」である宣王を含む一二王の在位に言及しており、青銅器銘によって直接的にその實在を確認できない王は幽王一人を残すのみとなった。「父」「祖」あるいは「兄」といった殷王の續柄に言及する甲骨史料と比較したとき、周王それぞれの續柄を示す情報が含まれていない憾みはあるものの、一二人の周王を在位順に記す迷盤銘の出現によって西周王朝の「王統譜」はほぼ確實なものとなったのである。

かつて王國維は「紙上の材料」と「地下の材料」を併用する「二重證據法」を提唱し、甲骨史料あるいは竹簡・木牘史料においてその論證能力の高さを示したが、⁽⁴⁾迷盤銘の出現によって、西周王朝の王統譜もようやくその洗禮を受けることができるようになった。王國維が主張するように、二重證據法が地下の新材料によって「紙上の材料を補正することができる」⁽⁵⁾可能性を秘めているのならば、地下の新材料たる迷盤銘は紙上の材料に如何なる補正を加えることができるのだろうか。

第一章 二つの王統譜

迷盤の發見に先立つこと約二五年、一九七六年二月に陝西省扶風縣莊白一號窖藏からもう一つの「王統譜」が出土している。總計一〇三件、有銘青銅器七四件からなるいわゆる微氏家族青銅器群の一つ史牆盤（一〇二七五・Ⅱ）である。⁽⁶⁾ 盤面に鑄込まれた二八四字の銘文は、中央の空白部によって前後二段に分割されており、その前段部分は歴代周王の事績、後段（嚴密には前段最後の三文字目から）は微氏一族の記述に當てられている。歴代周王の事績を記す銘文前段を示せば、

曰古なる文王、初めて政に盤蘇せり。上帝、懿徳を降して大いに粦り、上下を匍有し、萬邦を合わせ受けしめたり。綏圉なる武王、四方を適征し、殷を撻ち、峻民は永く恐るることなく、虜・微を狄ざけ、夷童を伐ちたり。

憲聖なる成王、左右は柔會剛鯨にして、用てここに周邦を徹めたり。淵哲なる康王、遂しみて億疆を尹したり。

弘魯なる昭王、廣く楚荆を能め、これ狩りして南行せり。祇顯なる穆王、誣いなる誨に型帥い、鬻ねて天子を

寧んじたり。天子、圉みて文・武の長刺を履ぎ、天子、眉にして、匈無し。上下を寒祁し、亟みて追いなる慕を

獄め、昊炤にして昊く亡し。上帝は嗣燕し、尤に天子に綰命・厚福・豊年を保授し、方蠻も覩見せざるは亡し。

となり、文王・武王・成王・康王・昭王・穆王と、史牆が仕える「天子」すなわち共王の計七王に及ぶ西周王朝の王統譜が記録されていたのである。

作器者史牆の祖先に言及する銘文後段は、この前段部分と對の關係にあり、「曰古なる文王」や「綏圉なる武王」といった表記と同じく二文字からなる形容句を伴いつつ、「靜幽なる高祖」「微の史たる刺祖」「勇惠なる乙祖」「堯明なる亞祖」「舒遲なる文考乙公」「孝友なる史牆」と表記される微氏家族六代の事績を記録する。ただし、微氏の祖先と歴代周王との直接的なかわりに言及することはほとんどなく、「武王、既に殷を伐つにおいて、微の史たる刺祖、すなわち來たりて武王に見ゆ。武王、則ち周公に命じ、寓を周に舍きて、處らしめたり」の一文によって、「微の史たる刺祖」が武

王克殷期に周に歸屬した人物であったことを知りうるのみである。

一方、西周王朝の歴代一二三王の在位に言及する速盤銘の前半部分は、速の祖先たちと歴代周王とのかわりを執拗に記述しようとする。その部分の読み下しを示そう。

速曰く、丕顯なる朕が皇高祖單公、赳々として克くその徳を明哲にし、**文王・武王**を夾召し、殷を撻ち、天の魯命を膺受し、四方を匍有せり。並びにその勤めたまえる疆土に宅りて、用て上帝に配さる。ここに朕が皇高祖公叔、克く**成王**を迷匹し、大命を成受し、方く不享を狄ざけ、用て四國・萬邦を奠めたり。ここに朕が皇高祖新室仲、克くその心を幽明にし、遠きを柔らげ邇きを能め、**康王**を會召し、方く不廷を懷けたり。ここに朕が皇高祖惠仲、克く政に盤蘇し、**猷**に成る有り、用て**昭王・穆王**を會け、政を四方に延き、楚荆を撲伐せり。ここに朕が皇高祖零伯、その心を養明にし、**服**を墜さず、用て**共王・懿王**に辟えたり。ここに朕が皇亞祖懿仲、致めて諫々とし、克くその辟考王・僖王を匍け保ち、周邦に成る有り。ここに朕が皇考共叔、穆々赳々として、政に蘇詢し、徳に明婁にして、**刺王**を享佐せり。速は撃めて朕が皇祖考の服を併ぎ、夙夜を虔み、朕が死事を敬めり。ゆえに**天子**は多く速に休を賜る。天子よ、それ萬年無疆、黃耆に耆るまで、周邦を保奠し、四方を諫辭せられんことを、と。

皇高祖單公に始まり、皇高祖公叔・皇高祖新室仲・皇高祖惠仲・皇高祖零伯・皇亞祖懿仲・皇考共叔と續く一族七代が、それぞれ文王・武王、成王、康王、昭王・穆王、共王・懿王、考王(孝王)・僖王(夷王)、刺王(厲王)に仕え、さまざまな勳功を擧げてきたこと、作器者である速は彼等「皇祖考」のあとを繼いでその職責につとめ、「天子」すなわち宣王の恩賜に浴したことが記されている。歴代周王と自らの祖先の事績を前段・後段に分かつて記述していた史牆盤銘と比較べたとき、速盤銘にはもはや兩者を分かちつ意志はなく、逆に自らの祖先の勳功を誇示するために周王が利用されているとの印象を受ける。祖先それぞれの勳功を歴代周王とのかわりにおいて示そうとしたことで、結果的に我々に西周王朝の王統譜を伝えることとなったといえるだろう。

表1

史牆盤	周王	逯 盤
高祖	文王	皇高祖單公
刺祖	武王	皇高祖公叔
乙祖	成王	皇高祖新室仲
亞祖祖辛	康王	皇高祖惠仲盞父
文考乙公	昭王	皇高祖零伯
	穆王	
史牆	共王	皇亞祖懿仲
	懿王	皇考共叔
	孝王	逯
	夷王	
	厲王	
	宣王	

ものとせねばならないだろうが、そうであればなおさら、何故にこの四組八王の組み合わせが選擇されたのか、あるいは逆に、何故に成王・康王・厲王は單獨で登場するのかということが問われなければならないだろう。

逯盤銘が一組とした文王と武王は、ともに王朝の創建にかかわる王ではあったが、兩者の事績は本來區別されるべきものであった。成王五年の紀年をもつ剌尊（六〇一四・IA）、

王、宗小子に京室に詣げて曰く、……ゆえに文王はこの大命を受けたまえり。これ武王は既に大邑商に克ち、則ち天に廷告して曰く、余はそれこの中國に宅り、これより民を辭めん、と。

に記された王言や、康王期に屬する大孟鼎（二八三七・IB）、

王若く曰く、不顯なる文王、天の有する大命を受けたまえり。武王に在りては、文の作せし邦を嗣ぎ、その匿を闢き、四方を匍有し、その民を峻正したまえり。

の王言のように、文王は大命（天命）を受けた王、武王は大邑商（殷）を倒し「四方を匍有し」た王として、この二王の事績は厳密に區別されていたのである。西周中期の共王期に草された史牆盤銘の王統譜もまた、「曰古なる文王、初めて

いま、史牆盤銘と逯盤銘によって知りうる歴代周王と兩家系との關係を示せば、表1のようになる⁽⁸⁾。歴代周王の事績を一人一人語っていた史牆盤銘と較べたとき、逯盤銘には文王と武王、昭王と穆王、共王と懿王、孝王と夷王の八王が二人ずつの四組とされ、それぞれ逯の皇高祖單公・皇高祖惠仲盞父・皇高祖零伯・皇亞祖懿仲に對應させられているという特徴があることは容易にみてとれる。一族の動功を歴代周王とのかかわりにおいて誇示しようとする逯盤銘の性格から考えて、逯の祖先と歴代周王との對應關係は多分に修辭的な

政に盤鉢せり。上帝、懿徳を降して大いに粦り、上下を匍有し、萬邦を合わせ受けしめたり」「繕園なる武王、四方を遙征し、殷を撻ち、峻民は永く恐るることなく、盧・微を狄ざげ、夷童を伐ちたり」のように、基本的に矧尊銘や大孟鼎銘以來の傳統的言説を踏襲している。

しかしながら、「天子」すなわち共王について、史牆盤銘が「天子圃みて文・武の長刺を履ぎ、天子、眉にして匈無し」と記すように、文王・武王を併記して「文・武」と統言する言説もまた同時に存在していた。この「文・武」を統言する言説は、『尙書』の最古層に屬する洛誥篇に「予小子を以て文・武の烈を揚げ」「文・武の勤教に迷わず」「誕いに文・武の受民を保んじ亂め」「これ周公誑いに文・武の受命を保んず」として保存されているが、青銅器銘では、西周中期の詢簋「王若く曰く、詢よ、丕顯なる文・武、命を受けたまえり」（四三三二・II B）・師詢簋「王若く曰く、師詢よ、丕顯なる文・武、天命を俘受し、殷民を奕則したまえり」（四三四二）や、乖伯簋「王若く曰く、乖伯よ、朕が丕顯なる祖文・武、大命を膺受したまえり」（四三三二）といった用例にまでさかのぼることができる。青銅器銘上では、西周中期頃に、文王・武王の事績を分かとうとする言説が次第に背後に退いていき、「文・武」二王統言の言説が主流を占めるようになるのである。史牆の一代後の癩の作器にかかる三式癩鐘銘（二五一―五六・III）に「曰古なる文王、初めて政に盤鉢せり。上帝、懿徳を降して大いに粦り、四方を匍有し、萬邦を合わせ受けしめたり。武王の既に殷を伐つにおいて、微の史たる刺祖、來りて武王に見ゆ」とある。史牆盤銘とほぼ同じ内容を記そうとするものの、本來武王に屬すべき「四方を匍有」すとの事績が文王にかけられ、文王と武王の事績を嚴密に區別する意識が希薄になりつつあったことを示している。厲王自作器である宗周鐘銘（二六〇・III）の「文・武の勤めたまえる疆土」という表現もまた、「文・武」二王の統言を前提として、その支配領域を言説化している。

速に對する冊命儀禮を記録した速盤銘の後半部分は、

王若く曰く、速よ、丕顯なる文・武、大命を膺受し、四方を匍有したまえり。則ちもとこれ乃が先聖祖考、先王を

夾召し、大命に爵勤せり。

との書きだしで始まる。文王・武王が大命（天命）をお受けになり、四方を領有されたとの歴史認識が示されるとともに、速の「先聖祖考」たちが先王をよく補佐してきたことが稱揚されている。四十二年速鼎銘と四十三年速鼎銘に記されている「速よ、丕顯なる文・武、大命を膺受し、四方を匍有したまえり。則ちもとこれ乃が先聖（祖）考、先王を夾召し、大命に爵勤し、周邦を奠めたり」との王言もまた速盤銘と全く同じ認識を共有しており、同時代の師克盥「王若く曰く、師克よ、丕顯なる文・武、大命を膺受し、四方を匍有したまえり。則ちもとこれ乃が先祖考、周邦に爵有り。王の身を扞禦し、爪牙と作れり」（四四六八）にもほぼ同じ表現がみえている。すでに「文・武」統言の言説に慣れ親しんでいた宣王期の周人たちは、「丕顯なる文・武、大命を膺受し、四方を匍有したまえり（丕顯文武、膺受大命、匍有四方）」という常套句を共有していたのである。⁽¹⁰⁾

速盤銘は、皇高祖單公が文王・武王を補佐し、「殷を撻ち、天の魯命を膺受し、四方を匍有」したことを誇示するが、それは文王・武王を一組として王朝の創建を語ろうとする當時の言説をふまえたものであり、そこに歴史的事実を正確に記録しようとする史官の心性を期待すべきではないだろう。速は自らの皇高祖單公が實際に文王・武王に仕えていたことを記録しようとしているのではなく、當時受け入れられていた言説を利用して、そこに皇高祖單公の勳功を挿入しようとしているにすぎないのである。

第二章 単一族の系譜

速盤銘は一族の系譜が文王・武王期にまでさかのぼると主張するが、速が属していた単一族の動向がはっきりしてくるのはせいぜい西周の中頃からである。一九七五年に岐山縣董家村の窖藏から発見された三年裘衛盃（九四五六・Ⅲ）は、矩伯と裘衛とのあいだに土地をめぐる係争があり、裘衛がそのことを訴え出た経緯を記録しており、そこに、

裘衛、すなわち伯邑父・榮伯・定伯・琮伯・單伯に覬告す。伯邑父・榮伯・定伯・琮伯・單伯、すなわち參有鬲・鬲土微邑・鬲馬單旃・鬲工邑人服に命じ、眾ともに田を幽・趙に受けしむ。

とあるように、裘衛の訴えをうけて裁決をくだした執政團の一人として單伯の名を確認することができる。⁽¹¹⁾揚簋「王、周の康宮に在り。旦、大室に格いたり、位に即く。鬲徒單伯内りて揚を右く。王、内史史年を呼び、揚に册命せしむ」(四二九二)に册命儀禮の右者として登場する鬲徒單伯もまた、三年裘衛盃の單伯との關係は明らかではないものの、ほぼ同時代の單一族に屬する人物である。さらに單伯昊生鐘(八二二)・昊生鐘(二〇五)・單昊生豆(四六七二)を遺した單伯昊生や、單伯原父鬲(七三七)の作者者單伯原父も單一族の構成員である。單伯昊生鐘銘の「丕顯なる皇祖・刺考、先王を迷匹し、大命に爵勤せり」の「爵勤大命」という表現は、逯盤銘や四十二年逯鼎銘・四十三年逯鼎銘、さらには毛公鼎銘にもみえており、西周後期に特有の表現である。西周の中頃にその地位を確立した單伯家は、西周後期までその勢力を保持していたと考えられる。

一方、逯盤が出土した楊家村の窖穴からは、單五父方壺・叔五父匜・單叔鬲が出土しており、そのうち、單五父と叔五父という二つの作者者名は、單叔五父Ⅱ叔五父Ⅱ單五父Ⅱという稱謂のヴァリエーションに収まる。⁽¹²⁾單叔五父(單五父・叔五父)は、「叔」の排行によって單一族の他の分節と區別されていた人物であり、單叔鬲の單叔もおそらくは同一人物である。この單叔五父と逯の關係は明らかにしがたいが、同じ窖穴から出土したことを評價するならば、逯はこの單叔家に屬していた可能性が高い。いずれにせよ、西周後期、單一族は少なくとも單伯家と單叔家という二つの分節に分かれていたことになる。⁽¹³⁾

逯盤銘に記された逯の祖先と周王との對應關係(表1)を参照するならば、單一族の動向がはっきりしてくるのは、逯の二代前の皇亞祖懿仲、あるいはその前の皇高祖零伯あたりからでしかなく、それ以前の單一族については、わずかにオーストラリア・メルボルン市のヴェイクトリア美術館が所蔵する西周前期の乳釘紋方鼎「叔、單公の寶障彝を作る」(二

二七〇)の銘文が知られているだけである。逡盤の発見以来、「單公」の名が記されたこの青銅器に注目が集まるようになったが、最初にこの青銅器を紹介した李學勤は、作冊大方鼎(二七五八―六一・IB)に似たこの方鼎に登場する單公を、單邑に封じられたとされる成王の少子臻だと考えていた。⁽¹⁶⁾しかしながら、單一族の始祖を成王の少子臻とする傳承は根據がうすいとされているし、逡盤銘自体も一族の出自を成王に求めようとはしていない。一方、この方鼎の作器者「叔」を成王に「仕えた」第二代皇高祖の公叔とし、作器對象の「單公」を文王・武王に「仕えた」初代皇高祖單公と考えようとする論考もみられるが、この方鼎を康王・昭王期のものと考えた李學勤の年代觀への反證は示されていない。いずれにせよ、この青銅器銘によつて皇高祖單公が文王・武王に「仕えた」とする逡盤銘の主張を支えることはできないだろう。さらに、一九五六年に眉縣李家村の窖藏から出土した盞駒尊／方尊(六〇―一一・二・II／六〇―一三・II B／九八九九―九九〇〇・II)の作器者盞を、逡盤銘の皇高祖惠仲盞父に比定しようとする主張もみられるが、この兩者を結びつけているのは、兩者が「盞」字を共有することと、盞駒尊の作器對象である文考大仲が皇高祖惠仲盞父の一代前の皇高祖新室仲と「仲」字を共有すること、および出土地の近さであり、そのいずれも確定的な證據とはいえない。盞諸器の存在によつて、皇高祖惠仲盞父の實在を證明することもやはり無理である。皇高祖單公や皇高祖惠仲盞父をめぐるこれらの議論はすべて、逡盤銘が歴史的事實を記録しているに相違ないという前提(あるいは期待)を共有しているが、「文・武」二王を統言して王朝の創建を語ろうとする「記憶」の場にこの青銅器銘が位置していることを忘れてはならないだろう。

そもそも、皇高祖單公・皇高祖公叔・皇高祖新室仲・皇高祖惠仲盞父・皇高祖零伯・皇亞祖懿仲・皇考共叔と記された逡の祖先のなかで、「皇高祖」が五人も登場すること自体が異様である。⁽¹⁸⁾史牆盤銘や、二式癩鐘「癩曰く、丕顯なる高祖・亞祖・文考、克くその心を明らかにし、尹□の威義を正け、用て先王に辟^つえたり」(二四七―五〇・III A)、あるいは西周後期の大簋「大、障簋を作り、用て高祖・皇考に享す」(四二二五)、楚公逆鐘「楚公逆、その先高祖考夫壬四方首を祀る」(近出九七)、さらには春秋後期の叔夷鐘銘(二七五)の「夷、その先舊及びその高祖に典^とらんとす」のように、高

祖に言及する青銅器銘はいくつか存在しているものの、そのいずれも速盤銘のように複数の高祖の名を列挙することはな⁽¹⁹⁾い。複数の祖先名を列挙したいのならば、たとえば史牆盤銘の刺祖・乙祖、あるいは一式癩鐘銘(二四六・Ⅲ)や盞方彝銘の文祖といった稱號も使用しえたはずである。速盤銘が「皇高祖」という稱號を好むのは、自らの家系の勳功を誇示し、祖先それぞれの至高性を強調したためであつたらうが、⁽²⁰⁾逆に「皇高祖」の稱號を亂發することによって、この系譜は馬脚を現してしまつたように思われる。

西周から東周への激動のなかで多くの有力氏族が斷絶していったが、単一族はそれを乗りこえ、東周王朝の卿士として文献史料にその名を留めることに成功した。王室を二分する大反亂となつた王子朝の亂(前五二〇—五一六年)において、悼王・敬王を補佐し、最終的な勝利を勝ち取ることに貢献した單穆公など、単一族は有力な卿士を輩出しているものの、その出自については、『國語』周語中の「今、朝や不才と雖も、周に分族有り」という單朝(單襄公)の言葉が遺されているのみである。「分族有りとは、王の族親なり」と韋昭注にいうように、単一族には周王室の分族であるという傳承があつたのかもしれないが、實際のところ先の成王少子臻説を除けば、単一族の始祖にかかわる傳承は何一つ確認できない。同じく東周期にまで生きのびた虢一族が、『春秋左氏傳』僖公五年「虢仲・虢叔は王季の穆なり、文王の卿士と爲り、勳は王室に在りて、盟府に藏さる」のように、王季の子輩(すなわち文王の兄弟)虢仲・虢叔に始まるという始祖傳承を遺したことに較べれば、単一族の始祖傳承のあやうさは覆うべくもない。そもそも、先に述べたように、速盤銘が誇示した一族の系譜には周王室の分族であることを示そうとする意志はなく、その意味で、単一族は自らの始祖傳承の形成に失敗したといえる。

それでは逆に、なぜ速はこのような系譜を銘文に記そうとしたのだろうか。速盤銘後半に記録された冊命儀禮において、宣王は「汝に命じて榮兌を^{たす}正け、四方の虞・林を^{たす}飢嗣し、宮御に用いしむ」との王命を發している。榮兌を補佐し、「四方の虞・林」を管轄せよとの命令であり、四十三年速鼎「昔、余は既に汝に命じて榮兌を正け、四方の虞・林を^{たす}飢嗣し、

宮御に用いせしめたり」や、一九八五年に楊家村から出土した、同じく速の作器にかかる速編鐘「天子、朕が先祖の服を經ちかい、多く速に休命を賜い、四方の虞・林を覇嗣せしめたまう」（『近出』一〇六―〇九）⁽²¹⁾にも同様の王命が記録されている。「四方の虞・林」とは、文字通りに解釋すれば、王朝の全支配領域の山林藪澤を意味することになり、いかにも修辭的な表現と考えるべきものであるが、それでもやはり、そのような王命を宣王から引き出した速の權勢の大きさを示しているように思われる。楊家村窖穴から出土した二七件の青銅器のうち、確實に速の作器にかかるものは一四件あり、四十二年速鼎の第一器は通高五一センチ、重さ三五・五キロ、第二器は通高五七・八センチ、重さ四六キロに達し、四十三年速鼎も通高五八センチ、重さ四四・五キロの第一器を筆頭に一〇器が連ねられている。速盃も通高が四八センチあり、おそらく西周期で最大級の大きさをほこっている。さらに速編鐘の第一器は通高六五・五センチ、重さは五〇・五キロに達している。厲王の自作器である宗周鐘が通高六五・六センチ、趺簋（四三七・ⅢA）が通高五九センチ、重さ六〇キロであるのと比較しても、さして遜色のない青銅器群である。おそらく、一臣下が作りえた青銅器群としては最大級のものであり、速の有していた權勢の大きさを示してあまりある。

いかなる理由によつてこのような權勢をもつに至つたのかは判然としないが、速は宣王朝を支える最有力者のひとりであつたはずである。⁽²⁴⁾そして、「四方の虞・林」を管轄せよと宣王に言わしめ、巨大な青銅器群を連ねて自らの權勢を誇示しえた速が最後になければならなかつたのが、自らの家系の始まりを文王・武王に結びつけ、王朝創建という輝かしい「記憶」に単一族をかかわらせることではなかつたのだろうか。⁽²⁵⁾おそらくは王朝創建期にまでさかのぼりえない、あるいはさほどたいしたことはなかつた一族の系譜を文王・武王の「記憶」に結びつけた結果、實際の系譜とのあいだに生じたであろう齟齬を調整しなければならなくなる。文王と武王が一組なのだから、それ以後の周王にも二王統言の言説を用いることで、速はその齟齬を調整しつつ、同時に祖先の數を「節約」できたはずである。

第三章 康 王 獨 尊

逡盤銘に記された逡一族の系譜は、歴史的事實を記録しようとしたものではなく、逡の權勢を背景として一族の勳功を誇示しようとした「作られた歴史」だと考えるべきであろう。逡盤銘に遺された王統譜は、この「作られた歴史」に現實味を與えるための重要な道具立てであり、文王と武王を一組として王朝の創建を語る「記憶」の場でその有効性を發揮しえたものであった。文王と武王を一組とする言説を利用しつつ、逡はさらに昭王・穆王、共王・懿王、孝王・夷王の三組六王に自らの祖先を對應させていったのではないかと考えたわけだが、そう考えるならば、逆に成王・康王・厲王の三王が何故に二王統言を免れ單獨で登場するのか、その理由を示す必要がある。厲王と組み合わされるべき宣王は、逡盤銘が草された時點では現「天子」であったので、厲王は單獨で登場せざるをえなかったとすれば、問題となるのは、成王と康王が何故に一組とされなかったのかということである。⁽²⁶⁾

青銅器銘研究の立場からいえば、康王は難しい問題をかかえている王である。冊命儀禮などを記録する青銅器銘には、「王、□に在り」や「王、□に格^たる」といった書式によって周王の所在に言及するものが多い。たとえば四十二年逡鼎、これ四十二年五月既生霸乙卯、王、周の康穆宮（周康穆宮）に在り。旦、王、大室に格^{いた}り、位に即く。嗣工散、虞逡を右け、門に入り、中廷に位し、北嚮す。尹氏、王に釐書を授く。王、史澂を呼び、逡に冊釐せしむ。王若く曰く、……。

には、王（宣王）が「周康穆宮」において、早朝「大室」にいたったことが記録され、翌四三年の紀時をもつ四十三年逡鼎は、この「周康穆宮」を「周康宮穆宮」と表記している。このような「康□宮」あるいは「康宮□宮」といった康宮諸宮と康王との關係をどのように考えるべきか。學界を數十年にわたって悩ませてきた「康宮問題」である。

西周前期の令方尊／方彝（六〇一六・IB／九九〇一・IB）は、康宮の名が記録される最古級の青銅器である。

これ八月、辰は甲申に在り。王、周公の子明保に命じ、三事・四方を尹たださしめ、卿事寮を授く。丁亥、矢に命じて周公の宮に告げしむ。公命じ、徯いでて卿事寮を同めしむ。これ十月月吉癸未、明公、朝に成周に至り、命を徯いだす。三事の命を舍あくに、卿事寮と諸尹と里君と百工とともにし、諸侯・侯・甸・男とともに、四方の命を舍あけ、と。既あわり

咸く命ず。甲申、明公、牲を京宮に用い、乙酉、牲を康宮に用う。咸く既あわり、牲を王に用う。明公、王より歸る。

八月甲申二二、周王は周公の子である明保（明公）に三事（王室行政）と四方（封建諸侯）を治めるべく、卿事寮の總攬を命じた。命をうけた明公は、その六〇日後の一〇月癸未二〇に成周に至り、三事の命令と四方の命令を傳達しおえ、その翌日、甲申二二の日に犠牲を京宮に用い、乙酉二二には康宮において犠牲を用い、その後、王（王所？）にも犠牲を用いたのである。成周には少なくとも「京宮」と「康宮」と呼ばれた二つの「宮」が存在したことになるが、唐蘭はこの京宮を太王（古公亶父）・王季・文王・武王・成王の宮廟、康宮を康王の宮廟だと考え、令方尊／方彝を昭王期のものだと主張した。さらに唐氏は、他の青銅器銘にみえる康昭宮・康穆宮・康宮倬大室・康刺宮といった康宮諸宮もそれぞれ昭王・穆王・夷王・厲王の宮廟であり、康王以降の歴代周王の宮廟は康宮の存在を前提として秩序づけられていたと考えたのである。⁽²⁷⁾

この唐氏の主張に異を唱えたのが、令方尊／方彝を成王期のもと考え、郭沫若や陳夢家であった。郭氏は、これら諸宮の名は「孤證單文」の嫌いがあり、唐氏の解釋を支える傍證に缺けること、西周諸王のなかで何故に康王の宮廟だけが「獨尊」であるのかわからないこと、などを指摘したうえで、京や康あるいは昭・穆・刺といった文字は「懿美の字」として宮室の名に使用されたのだと主張した。⁽²⁸⁾ 一方、陳氏は、宮・寢・室・家といった語は生人居住の建物を指しており、先祖鬼神のための廟や宗・宗室とは區別されるべきことを主張し、唐氏の康宮Ⅱ康王宮廟説を否定した。⁽²⁹⁾ そしてこれらの反論に對して、唐氏が再反論を試みたのが一九六一年に發表された「西周銅器斷代中的『康宮』問題」である。⁽³⁰⁾ 第一章「分歧所在和問題的重要性」で、自説と郭・陳兩氏の主張との相違點を整理したのち、第二章「爲什麼說『康宮』是康王之宮」では改めて自説を再確認しつつ、令方尊／方彝銘の康宮はやはり康王の宮廟であること、康宮に言及する他の青銅

器銘の検討からも康宮を康王の宮廟と考えてよいこと、古文獻の記載からも康宮が康王の宮廟であることが證明できると、周代の宗法制度においては昭と穆とを區別することから、康宮は康王の宮廟であり、昭・穆兩宮は昭王・穆王の宮廟だといえること、といった主張が展開されている。第三章「關於『宮與廟有分別』的討論」は、陳夢家に對する反論。「宮」は建築群の總名であり、その内部に廟や寢・大室を含みうること、康宮は康廟・康寢とも呼ぶことができ、康王の生前に建築された可能性があることなどが主張される。第四章「一部分西周青銅器的斷代問題」は、康宮諸宮の記載に基づいて青銅器の制作年代を確定しようとする試み。康宮の名が記された青銅器は康王より前にさかのぼりえないし、以下、康昭宮・康穆宮・康宮僖大室・康刺宮といった康宮諸宮の名がみえる青銅器も同様である。この試みは、のちに『西周青銅器銘文分代史徵』（一九八六年）としてまとめられ、中華書局より上梓された。

康宮Ⅱ康王宮廟説の提唱、郭・陳兩氏の反論、唐氏の再反論と展開した「康宮問題」は、その後も賛同・反對の兩説をそれぞれ生み出しつつ、最終的な決着をみないまま今日にいたつた。⁽³¹⁾表2に示したように、この間、康宮諸宮に言及する青銅器銘は増加し、周康宮穆宮・周康僖宮・周康宮僖宮といった新たな宮名も確認されるなど、郭氏のいう「孤證單文」の時代は去りつつあったが、さりとて決定的な史料も發見されないうまま、二〇〇三年の迷盤銘の出現を迎えることとなる。すでに見てきたように、一族の勳功を誇示しようとする迷盤銘には歴代周王の王統譜が記録されており、そのうち、刺王（厲王）の名は一九九七年に銘文が確認された吳虎鼎（近出 三三四）に次ぐ二例目の發見となり、⁽³²⁾考王（孝王）・僖王（夷王）二王の名はこの迷盤銘によって初めて確認されたのである。そして、その僖王（夷王）の「僖」字が周康僖宮・周康宮僖宮あるいは周康宮僖大室の「僖」字と一致し、刺王（厲王）の「刺」字が周康刺宮の「刺」字と一致したことによって、康宮僖大室・康刺宮をそれぞれ夷王・厲王の宮廟と考えた唐蘭の主張は、確定的な證據を得ることとなった。康宮諸宮のなかに夷王・厲王の宮廟が確認された以上、康昭宮・康穆宮（康宮穆宮）も同様に昭王・穆王の宮廟と考えるべきであり、それら康宮諸宮の基礎となる康宮もまた、それに強いて「懿美の字」などといった別解を與える必要はなく、他の

表2 康宮諸宮ならびにその関連施設

王 在	青銅器銘	林斷代	『集成』・他
康宮	令方尊／方彝	I B	6016・前期／9901・前期
康宮・大室	*卽簋	II B	4259・中期
康宮	康鼎	III A	2786・中期後期
康宮・齊伯室	*敵簋		『近出』483・中期
康宮大室	君夫簋		4178・中期
康宮	*衛簋	III A	4209-12・中期
康宮	*楚簋		4246-9・後期
周康宮・大室	*輔師菱簋	II B	4286・後期
周康宮・大室	休盤	III A	10170・中期
周康宮・大室	揚簋	III A	4294-5・後期
周康宮	*夾簋		張光裕2002・中期
周康宮・大室	*申簋		4267・中期
周康宮・大室	*師頰簋		4312・後期
周康宮新宮・大室	望簋		4272・中期
周康昭宮・大室	頌鼎／簋／壺	III B	2827-9／4332-9／9731-2・後期
周康昭宮・大室	*趨鼎		2815・後期
周康穆宮	善夫克盥	III B	4465・後期→宣王
周康穆宮・大室	袁鼎／盤		2819／10172・後期→宣王
周康穆宮・大室	*四十二年逯鼎		→宣王
周康宮穆宮・周廟	*四十三年逯鼎		→宣王
周康宮・穆大室	伊簋	III B	4287・後期→宣王
周康宮倅大室	鬲從鼎／簋	III B	2818・後期／4278・後期
周康宮倅宮・大室	*此鼎／簋	III A	2821-3／4303-10・後期
周康宮倅宮	*吳虎鼎		『近出』364・後期→宣王
周康倅宮	*成鐘		陳佩芬2000・厲王
周康刺宮	克鐘／罍	III	203-8／209・後期→宣王
周康寢	師遽方彝	II	9897・中期
康廟	南宮柳鼎	III A	2805・後期
周・康廟	元年師兌簋	III B	4274-5・後期
康	*應侯見工鐘	III	107-9・中後期

*印は唐蘭1962以降に発見された青銅器を示す。

張光裕2002：「新見西周『夾』簋銘文說釋」（『題三屆國際漢學會論文集 古文字與商周文明』）

陳佩芬2000：「新獲兩周青銅器」（『上海博物館集刊』8）

康宮諸宮と同様に康王の宮廟と考えるべきものとなろう。康宮の名がみえる最古級の青銅器であった令方尊／方彝を西周ⅠBに斷代し、同じく令の作器にかかる令簋(四三〇〇一〇一)をⅡAに斷代する林巳奈夫の斷代案もこれに矛盾しない。共王・懿王・孝王にかかわる施設の存在は知られていないが、康王の宮廟である康宮の存在を前提として、康宮諸宮が秩序づけられていたことは間違いない。康宮あるいは康王は確かに「獨尊」であった。

それでは、何故、康宮あるいは康王は「獨尊」なのだろうか。かつて郭沫若が突きつけたこの疑問に對して、唐蘭は次のように答えた。

西周初年、武王・成王と康王は多くの諸侯を封建した。『春秋左氏傳』昭公二十六年に「昔、武王、殷に克ち、成王、四方を靖んじ、康王、民を息わせ、並に母弟を建て、以て周に蕃屏とせり」とあるように、封建された武王の母弟はその父文王を祀り、成王の母弟は武王を祀り、康王の母弟は成王を祀った。文王・武王・成王は京宮で祀られているので、京宮は周王室と同姓諸侯共通の宗廟となる。ところが、康王以後になると、領土の分配はほぼ完了し、諸侯の封建を行うことができなくなる。その結果、康王以後の宗廟は周王室だけのものとなり、康宮「獨尊」の状況が出現する、と。康王は母弟を封建しえた最後の王であると同時に、その子輩を封建しえなかった最初の王でもある。諸侯封建における康王の畫期性に注目することで、唐氏は康宮あるいは康王の「獨尊」を説明しようとしたのである。しかしながら、康王を周王室だけの宗廟の始祖とみなし、そこに康宮「獨尊」の理由を求めた唐蘭は、康王の子昭王以來、康宮が「獨尊」の地位に在り續けたと考へざるをえなくなる。その結果、唐氏は康宮の連續性に關心を奪われ、令方尊／方彝にみえていた成周の康宮と表2の輔師鬲以下にみえる「周康宮」を區別できなくなってしまうのである。

應侯見工鐘(一〇七・Ⅲ)に「これ正二月初吉、王、成周より歸る。應侯見工、王を周に遺る。辛未、王、康に格る」とあるように、成周と周は排他的な關係にあり、兩者を區別しない唐蘭の主張は成立しえない。周の地望をめぐっては諸説あるけれども、これを岐周の周原一帯に求める考え方が最も説得的であることについてはかつて述べたことがある。⁽³⁴⁾

「周の康宮」は林斷代のⅡBあたりからその存在を確認できるようになるが、ほぼ同時代の吳方彝（九八九八）には成王の「大室」である周成大室がみえ、呂鼎（二八三八）には穆王の「大室」である周穆王大室がみえている。また呂壺（九七二八）には、その所在地を確定することはできないけれども、成王の宮廟と考えられる成宮の名がみえている。周の康宮に言及する青銅器銘が多いことは事實だが、そのことはただちに康宮の「獨尊」を意味するものではない。實は唐蘭も氣がついていたのだが、康昭宮や康穆宮などの康宮諸宮が出揃うのは厲王・宣王期、林斷代のⅢAからⅢBにかけての時期であり、その康宮諸宮に秩序を與える康宮が「獨尊」の地位を獲得するのやはり同じく厲王・宣王期であったと考えるべきである。康宮そして康王は終始「獨尊」の地位にあったのではなく、厲王・宣王期にその「獨尊」たることを確認され、康宮諸宮の秩序の中にその地位を具現させるのである。

四十二年速鼎や四十三年速鼎といった宣王期標準器群と周康宮穆宮（周康穆宮）・周康宮穆大室といった穆王宮室とのあいだに親和性があることから、宣王期の周人が穆王に自らの正統性を重ねていたのではないかと述べたことがあるが、⁽³⁶⁾周人たちはその周康宮穆宮や周康宮穆大室の中に康王の「獨尊」を認めていたのである。速盤銘が康王を成王と一組とせず、單獨の王として自らの祖先に對應させようとしたのは、盤銘が草された當時の周人たちにとって康王が「獨尊」であったことに照應しているだろう。

第四章 周王の記憶

速盤銘は祖先それぞれの勳功を歴代周王とのかかわりにおいて示そうとしていた。康王に「仕えた」皇高祖新室仲について、盤銘は、

ここに朕が皇高祖新室仲、克くその心を幽明にし、遠きを柔らげ^{ちか}適きを能め^{わざ}、康王を會召し、^{あまね}方く不廷を懷けたり。と記しており、康王が「方く不廷を懷け」た王として宣王期の周人たちに記憶されていたことを傳えている。「不廷」と

は王朝に來貢せぬ勢力をい⁽³⁷⁾、厲王自作器である五祀鉄鐘（三五八）や毛公鼎など、厲王・宣王期以後にその用例が確認できるようになる語彙である。⁽³⁸⁾ 厲王・宣王期の青銅器銘には、獬豸や淮夷（南淮夷・南夷）への遠征をいうものが多く、禹鼎（二八三三四・ⅢB）には、南淮夷・東夷を巻き込んだ鄂侯馭方の反亂も記録されている。⁽³⁹⁾ 毛公鼎銘が「鬻々たる四方、大いに縦^たれて靜^ずらかならず」と嘆くように、この時期、王朝が支配秩序崩壊の危機にさらされていたことは想像に難くなく、逆にそうであればこそ、厲王自作器である鉄簋に記された「朕が心は、四方に墜^おぶ」との王言や、兮甲盤「王、甲に命ず。成周四方の積を政嗣し、南淮夷に至れ。淮夷は舊^もと我が貞晦の人なり。敢えてその貞・其の積・其の進人を出さざる母れ」（二〇一七四・ⅢB）にみえる南淮夷に對する支配意思の表明など、王朝の支配秩序の回復が強く志向されるようになる。そして、その時、かつて王朝に靡かぬ「不廷」を懷けた王として回顧されたのが康王であった。

武王の崩御後、いわゆる三監の亂をはじめとした諸反亂が勃發し、成王や周公旦がその鎮壓にあたったことは古文獻の等しく傳えるところである。⁽⁴⁰⁾ 青銅器銘においても、大保簋「王、冡子聖を伐つ」（四一四〇・ⅠA）・小臣單解「王の後□、商に克ちて、成自在在り」（六五二二・ⅠA）、あるいは康侯簋「王、商邑を束伐す。命を康侯に徃^いだし、衛に鄙^くつくらしむ」（四〇五九・ⅠA）が、三監の亂の鎮壓、ならびにその後の衛の封建に言及している。迷盤銘は成王に「仕えた」皇高祖公叔について、

ここに朕が皇高祖公叔、克く成王を速^あ匹し、大命を成受し、方^あく不^と享^をを狄^さげ、用て四國・萬邦を奠^ためたり。

と記していたが、「方^あく不^と享^をを狄^さげ」の「不^と享^を」とは來貢せざる勢力を意味しており、⁽⁴¹⁾ それは具體的には三監の亂鎮壓などの記憶を踏まえているのだと思われる。成王期に屬しうる軍事活動には、ほかに剛切尊/卣「王、禁を征す」（五九七七・ⅠA/五三八三）・禽簋「王、禁侯を伐つ」（四〇四一・ⅠB）や、聖方鼎「これ周公、ここに東夷・豊伯・薄姑を征伐し、咸く伐^つ」（二七三九）・旅鼎「これ公大保、來たりて反夷を伐てし年」（九七二八）などがあるが、康王期の宜侯矢簋「王、武王・成王の伐てる商圖を省し、徃^いて東國の圖を省す」（四三三〇・ⅠB）が、康王の省（適省）すなわち軍事

的査察行爲の對象を「武王・成王の伐てる商圖」と「東國の圖」に分かつように、それはなお武王克殷の延長上にあるものと認識されていた。史牆盤銘は成王の事績を「左右は柔會剛鯨にして、用てここに周邦を徹めたり」、康王の事績を「遂しみて億疆を尹したり」と記録しており、「周邦を徹めたり」と「億疆を尹したり」とは對句の關係にある。「左右は柔會剛鯨」の意味はよくわからないが、史牆盤銘は成王の事績がほぼ「周邦」に限定されるところの認識を示している。それに對して、康王の事績は「億疆」にかけられ、その支配領域のさらなる擴大を示唆している。迷盤銘の「方く不廷を懐けたり」との連續性をみてとることができらるだろう。

周王朝の本格的な征討活動が記録されるのは、林巳奈夫がⅠBからⅡBに斷代する青銅器銘においてである。大孟鼎(ⅠB)と同じ孟の作器にかかる小孟鼎(二八三九)は、鬼方を遠征した孟が、「獸(簋)二人、獲馘四千八百□十二馘、俘人萬三千八十一人、俘馬□□匹、俘車卅兩、俘牛三百五十五牛、羊卅八羊」「獸(簋)一人、獲馘二百卅七馘、俘人□□人、俘馬四匹、俘車百□兩」に及ぶ捕虜・首級・鹵獲品を献上したことを記録しており、この時期に西周期最大規模の征討活動があったことを傳えている。

これ五月、王、斥に在り。戊子、作冊折に命じ、望土を相侯に賜り、金を賜い、臣を賜わしむ。王の休を揚す。これ王の十又九祀、用て父乙の罍を作る、それ永く寶とせよ。

と、在位一九年の年に王が斥に在り、相侯に望土の地を賜ったことを記録する折尊/觥/方彝(六〇〇二/九三〇三・ⅠB/九八九五・ⅠB)の作器者作冊折は、史牆盤に記録された史牆の亞祖祖辛であり、これを成王期にまで溯らせることはできない(表1参照)。林斷代のⅠBを勘案すれば、康王期のものとしてよいであろうが、この斥の地では別に、夷伯の安撫(表1参照)への采土の賜與が行われていたことが記録されている。大量の捕虜の捕獲、あるいは采土の賜與、さらに宜侯矢簋「王、宜の宗社に位し、南嚮す。王、虎侯矢に命ず。曰く、ああ、宜に侯たれ」に記録された虎侯矢の宜への移封など、康王期の青銅器銘には本格的な征討活動の開始と支配領域の擴大を示唆するものが多い。宜侯矢簋は康王が「武王・成王の伐て

る商圖」と「東國の圖」を省（適省）したことを傳えていたし、大孟鼎、

王曰く、孟よ、すなわち召夾して、戎を死嗣せよ。罰訟を敏み諫み、夙夕し我一人を召け、四方に悉たらしめよ。我において、それ先王の授けられたまいし民と授けられたまいし疆土とを適省せよ。

では、孟が康王にかわって「先王の授けられたまいし民と授けられたまいし疆土」を適省することが命ぜられている。「四方」と「我一人」すなわち「王身」は、王の移動（適省）を介して結びつき、「王身」から「四方」に至る王朝秩序の言説化が始まりつつあった。⁽⁴⁹⁾

林斷代のⅠBの時期に本格化した軍事活動は、續くⅡA・ⅡBの時代へと引き繼がれていく。甯鼎「これ王、東夷を伐つ」（二七四〇・ⅡA）の東夷や、令簋「これ王ここに楚伯を伐ちて、炎に在り」・過伯簋「過伯、王に従いて反荆を伐つ」（三九〇七・ⅡA）の楚荆、あるいは師旂鼎「師旂の衆僕、王の于方を征するに従わず」（二八〇九・ⅡB）の于方については、周王自身による遠征活動が記録され、さらに伯懋父・伯辟父・伯雍父（師雍父）といった人物がこの時期の軍事活動を擔っていたことが知られている。また班簋「王、毛公に命ず、邦冢君・土馭・或人を以いて、東國の疇戎を伐て、と。⁽⁵¹⁾……三年、東國を靜む」（四三三一・ⅡA）・明公尊「これ王、明公に命ず、三族を遣わし、東國を伐て、と」（四〇二九）は、この時期に「東國」への征討活動があったことを傳えている。⁽⁵²⁾

「遂しみて億疆を尹し」た康王の事績に次いで、史牆盤銘は昭王の事績を「廣く楚荆を能め、これ狩りして南行せり」と記録していた。昭王の「南行」が先に引いた令簋銘・過伯簋銘にもみえる楚荆への親征に該当することは疑いないだろう。しかしながら、林斷代ⅡAの青銅器銘には東夷あるいは東國への親征も記録されていたように、昭王の親征は必ずしも楚荆に限定されたものではなかったはずである。史牆盤銘が昭王の南征にのみ言及するのは、それが昭王の最も記憶されるべき事績であったからであろうが、逆にそのことは昭王の他の事績を記憶の背後へと追いやってしまうことにもなる。昭王といえは南征なのであり、その記憶は以後ゆらぐことなく、『春秋左氏傳』僖公四年「昭王、南征して復らず」や、

『竹書紀年』の「周昭王十六年、楚荆を伐つ」（『初學記』卷七）・「周昭王十九年、……六師を漢に喪う」（『初學記』卷七）・「周昭王の末年、……その年、王、南巡して返らず」（『太平御覽』卷八七四）といった文献史料へと引き継がれていくのである。

東夷・東國への遠征、あるいは呂行壺「伯懋父北征し、これ還る」にみえる伯懋父の「北征」など、林斷代のⅡAからⅡBにかけての青銅器銘に記録されていた征討活動は、南征と強く結びついてしまった昭王に属しえない記憶となり、昭王に前後する王との親和性を強めていくことになるだろう。穆王について史牆盤銘は「訝おろいなるはかりごと 誨ならに型帥かざい、隣かざねて天子を寧なじたり」と抽象的な事績しか書きえなかつたが、二王統言の言説を用いる迷盤銘は、

ここに朕が皇高祖惠仲盞父、政に盤はかりごと穌ことし、猷はかりごとに成る有り、用て昭王・穆王を會あひ、政を四方に延き、楚荆を撲伐せり。

と記し、昭王・穆王を「四方」あるいは「楚荆」に結びつけようとしている。昭王南征の記憶を踏まえた記述ではあるが、それは同時に、穆王と「四方」とのかかわりを認めようとする表現でもあるだろう。⁽⁵³⁾ 戎生鐘（『近出』二七—三四）に、

戎生曰く、休うらわしき辭わが皇祖憲公、赳あ々あ々あとして、その明心を啓き、その猷はかりごとを廣経にす。よく穆天子の淵靈に稱あい、用てこの外土に建ち、蠻戎を適嗣し、用て不廷方を鞅おむ。

とあるように、穆王（穆天子）の記憶は「蠻戎」「不廷方」に結びつけられていくのである。⁽⁵⁴⁾ 穆王について、『春秋左氏傳』は「塗山之會」（昭公四年）・「周行天下」（昭公十二年）の傳承を記録し、『竹書紀年』は「北征」（『山海經』大荒北經注など）・「西征」（『山海經』西山經注など）・「西征昆侖丘」（『穆天子傳』注など）・「伐楚」（『藝文類聚』卷九など）・「東征・西征・南征・北征」（『開元占經』卷四）といった傳承を傳えている。さらに『國語』周語上と『穆天子傳』には穆王の犬戎遠征も傳えられている。これら穆王をめぐる傳承の豊かさは、昭王の南征と同様、周人たちが穆王に結びつけていった「四方」外征の記憶にその源を發しているといえるだろう。

文王・武王、成王、康王、そして昭王・穆王の事績を自らの祖先とのかかわりで「記録」してきた速盤銘だが、その皇高祖零伯・皇亞祖懿仲については、

ここに朕が皇高祖零伯、その心を葬明にし、□服を墜さず、用て共王・懿王に辟つつかえたり。ここに朕が皇亞祖懿仲、致つとめて諫々とし、克くその辟考王・偃王を匍なげ保ち、周邦に成る有り。

と記すのみで、彼等が「仕えた」共王・懿王、孝王（考王）・夷王（偃王）四王の事績になら言及しようとする⁽⁵⁵⁾。つとに指摘されているように、共王期頃を境として册命金文が急増し、殷以来の「事」概念から周独自の「嗣」概念への交代が認められるようになる⁽⁵⁷⁾。貝塚茂樹のいう「寶貝賜與形式金文」から「官職車服策命形式金文」への轉換もまた同じ事象を指しており⁽⁵⁸⁾、それは軍功への恩賞から職掌任命に對する恩賞への變化でもあった。王朝は外征への關心を失っていくが、それは支配秩序の回復を志向し、靡かぬ「不廷」を懐けた康王に「獨尊」の地位を認めていた後の周人たちにとつては、記憶すべき事柄をもたぬ時代の始まりでもある。速盤銘の沈黙は、二王統言の言説を用いている點を差し引いてもなお、共王期頃に始まる西周文化の轉換によく對應している。

速盤銘の沈黙は、これら諸王にまつわる記憶の少なさにも對應している。『太平御覽』卷八五に引かれる西晉・皇甫謐の『帝王世紀』が「周、恭王より夷王に至る四世、年紀明らかならず」と嘆いたように、文献史料に就いてみても、共王以下の諸王にかかわる記事は貧弱であるといわねばならない。『史記』周本紀は、『國語』周語上に取材した共王の密康公誅滅を記したあと、續く懿王・孝王・夷王については王位繼承の混亂を伝えるのみで、各王の事績を何一つ具體的に記述しえず、ただ「懿王の時、王室遂に衰え、詩人、刺を作す」と記すのがやつとである。周本紀が取材した『國語』周語上は、穆王の犬戎遠征のあと、共王の密康公誅滅をはさんで、一氣に厲王暴虐・奔虢へと話題をとばしており、穆王と厲王には生まれた四王の記憶の少なさを露呈している⁽⁵⁹⁾。唯一記録された密康公誅滅もまた完全に孤立した傳承であつて、共王との必然的な結びつきを缺くとすれば、『國語』そして『史記』周本紀は、これら四王についてほとんど何も語りえてい

ないことになろう。⁽⁶⁰⁾

事情は『春秋左氏傳』『竹書紀年』についてもほぼ同じである。『春秋左氏傳』は共王・懿王・孝王については何も語りえず、夷王についてわずかに「夷王に至りて、王、その身に愆とがあり、諸侯、並びにその望に走り、以て王の身を祈らざるは莫し」という王子朝の發言を傳えているだけである（昭公二六年）。『竹書紀年』もまた、懿王元年の日食記事を除けば、共王・懿王・孝王についての遺文はなく、夷王に至ってようやく「夷王二年、蜀人・呂人來たりて瓊玉を獻ず」（『太平御覽』卷八五など）・「三年、王、諸侯を致し、齊哀公を鼎に烹る」（『太平御覽』卷八五など）・「夷王、杜林に獵し、一犀牛を得」（『太平御覽』卷八九〇）・「夷王衰弱し、荒服朝せず、乃ち公に命じて六師を率い、太原の戎を伐たしむ」（『後漢書』西羌傳注）といった記事がみられるようになる。五年師旅簋（四二二六一七・ⅢA）に「王曰く、師旅よ、汝に命じて齊に羞追せしむ」とあり、これをほぼこの頃のものとするれば、夷王あたりから再び周王の軍事活動が記憶されるようになると思われる。一王統言の言説を用いる迷盤銘は沈黙を守ったが、それは迷盤銘の「時代」の幕開けを告げているといえるだろう。⁽⁶¹⁾

おわりに

厲王・宣王期には「獨尊」であり、成王との統言を免れていた康王は、その地位を文献史料に伝えることができなかつた。⁽⁶²⁾『史記』周本紀が、成王・康王二王の治世を總括して、

成・康の際、天下安寧にして、刑錯ちがきて四十餘年用いず。

と記したように、康王はやがて成王と統言され、理想的な安寧の時代の王とみなされるようになる。『太平御覽』卷八五などに引かれる『竹書紀年』にもこれと同じ記述があるように、成王と康王を一組とし、その治世を安寧とみなす言説は、戦國期には既に普遍的なものとなっていたと思われる。⁽⁶³⁾

康王「獨尊」が忘れられ、成王・康王を統言する言説が成立する契機となったのは、周の東遷であろうと考えられる。成周の地は成王の記憶と強く結びついており、かつ康王「獨尊」を具現していた康宮諸宮はその地になかったからである。『詩經』周頌・昊天有成命に「昊天、成命有り、二后これを受く、成王敢えて康からず、夙夜、命に基づき宥密にす」とある。二后、すなわち文王・武王について成王に言及するこの詩句は、文王と武王を一組とし、かつ成王と康王を別個に扱おうとする速盤銘と同じ認識を共有しているといえる。しかしながら、同じく周頌・執競「競きを執る武王、競き無けんやこれ烈、不顯なる成・康、上帝これを皇とせり、彼の成・康より、四方を奄有す」に、武王について成王・康王二王の事績がうたわれるように、周頌の時代にはすでに成王と康王を一組とする言説がうまれつつあった。『詩經』三頌の下限を魯僖公（在位六五九—二七〇年）・宋襄公（在位前六五〇—三七年）にかけて理解する立場をとれば、康王「獨尊」の忘却、成王・康王二王統言の一般化は、速盤銘からさほど隔たっていない時代に始まりつつあったと思われる。

先に康王「獨尊」についての唐蘭の説明をみたが、そこで唐氏は「春秋左氏傳」昭公二六年の「昔、武王、殷に克ち、成王、四方を靖んじ、康王、民を息わせ、並に母弟を建て、以て周に蕃屏とせり」の一文を引いていた。康王が母弟を封建した王であるとの認識は、『春秋左氏傳』昭公九年「文・武・成・康の母弟を建て、以て周に蕃屏とせり」の一文でも確認することができるが、實際に史料に就いてみれば、あの単一族を除いて、康王の母弟（すなわち成王の子輩）を始祖とする諸侯を確認することはできない。『春秋左氏傳』僖公二四年の、

昔、周公、二叔の戚がざるを弔む。故に親戚を封建し、以て周に蕃屏とせり。管・蔡・邶・霍・魯・衛・毛・聃・郟・雍・曹・滕・畢・原・鄭・郇は、文の昭なり。邗・晉・應・韓は、武の穆なり。凡・蔣・邢・茅・胙・祭は、周公の胤なり。

という一文が示しているように、諸侯始封の傳承は文王・武王の子輩、あるいは周公旦の子輩へと收斂し、最終的には成王の治世にかけられてしまうのである。⁽⁶⁸⁾ 康王は周初の封建にその名を連ねてはいるものの、康王期の封建をめぐる具體的

な記憶は失われてしまった。

孟による鬼方遠征、あるいは在位一九年のことと記録される斥地での一連の活動など、康王期の軍事活動の記憶もまた文献史料に伝えられることはなかった。かつて「不廷」を懐けた王として回顧されていた康王は、「民を息わせ」た王へとその姿を變えてしまい、その軍事活動の記憶は康王との結びつきを失っていく。たとえば、『後漢書』西羌傳注に引く『竹書紀年』は、文王の父王季（季歴）が殷王武乙の三五年に「西落鬼戎」を伐ち、その王二〇人を捕虜としたと記録している。王國維「鬼方昆夷獫狁考」（『觀堂集林』）が述べるように、この鬼戎は鬼方のことと考えてよいであろうが、周建國前の王季の時代にこれほど大規模な鬼方遠征があったことを想定することは難しい。⁽⁶⁹⁾ 康王期の事績であることを忘れられた鬼方遠征が、王季の事績として再利用されているのだろう。穆王の犬戎遠征の傳承もまたそのヴァリアントであるかもしれない。⁽⁷⁰⁾

「天下安寧にして、刑錯きて四十餘年用いず」ということばで成王・康王の治世を總括した『史記』周本紀が、實際に康王について書きえたことは、成王崩御から康王即位にいたる一連の儀式を主題とする『尚書』周書の顧命・康誥（康王之誥）兩篇の要旨と、畢命篇の書序「康王、作策畢公に命じ、居里を分かちて、周郊を成し、畢命を作る」⁽⁷¹⁾でしかない。楚世家には『春秋左氏傳』昭公四年に取材した「康王に豊宮の朝有り」という一文が書き留められているが、『史記』は康王の事績をほぼ完全に忘れ去っている。以後、康王は時に貶められることはあっても、その「獨尊」を再び思い出されることはなかった。

註

- (1) 陕西省考古研究所・寶鷄市考古工作队・眉縣文化館「陝西眉縣楊家村西周青銅器窖藏」（『考古與文物』二〇〇三—二〇〇三—一六六）、陝西省文物局・中華世紀壇藝術館『盛世吉金——陝西寶鷄眉縣青銅器窖藏』（北京出版社、二〇〇三年）など。

- (2) 『史記』周本紀「四十六年、宣王崩」。しかしながら、すでに多くの研究者が指摘するように、「四十又二年五月既生霸乙卯」と「四十又三年六月既生霸丁亥」の二つの紀時は曆譜上でうまく接続しない。
- (3) 『史記』周本紀「懿王崩、共王弟辟方立、是爲孝王。孝王崩、諸侯復立懿王太子燮、是爲夷王」。
- (4) 王國維の「二重證據法」については、井波陵一「王國維と二重證據法」〔邊境出土木簡の研究〕朋友書店、二〇〇三年〕を参照のこと。
- (5) 王國維『古史新證——王國維最後の講義』（清華大學出版社、一九九四年）に「吾輩生於今日、幸於紙上之材料外、更得地下之新材料、由此種材料、我輩固得據以補正紙上之材料」とある。
- (6) 陝西周原考古隊「陝西扶風莊白一號西周青銅器窖藏發掘簡報」〔文物〕一九七八—三、尹盛平「西周微氏家族青銅器群研究」〔文物出版社、一九九二年〕。なお、青銅器の初出にあたっては、『殷周金文集成』（中華書局、一九八四—一九四年。以下、『集成』）の著録番號と林巳奈夫「殷周時代青銅器の研究——殷周時代青銅器綜覽一」（吉川弘文館、一九八四年）の斷代案（以下、林斷代）を示す。『殷周金文集成』に著録されていないものについては、適宜「近出殷周金文集録」（中華書局、二〇〇二年。以下、『近出』）の著録番號などで補うこととする。
- (7) 「陝西眉縣出土窖藏青銅器筆談」〔文物〕二〇〇三—六）において、劉軍社は、史牆盤銘と迷盤銘の關心の相異
- について「史牆盤側重的是周王的功績、迷盤側重的是單氏家族先祖的事迹」と述べている。
- (8) 劉士義「牆盤・迷盤之對比研究——兼談西周微氏・單公家族窖藏銅器群的歷史意義」〔文博〕二〇〇四—五）も兩盤銘の比較を意圖した論考であるが、本稿の見解とは異なる。就いて参照されたい。
- (9) 『尚書』ではほかに、顧命（康王之命）・文侯之命に「文・武」の表現がみられるが、これら「命」の成立が「誥」に遅れることについては、松本雅明『春秋戰國における尚書の展開』序説（風間書房、一九六六。のち松本雅明著作集（二二）、弘生書林、一九八八年に再録）を参照。
- (10) 毛公鼎「王若く曰く、父厝よ、不顯なる文・武、皇天弘いにその徳に厭き、我が有周に配す。大命を膺受し、不廷方を率懷し、文・武の耿光に聞たされざる亡し」（二八四一・ⅢB）もまた、同じ認識を共有している。
- (11) 參有嗣の一人として名が擧げられている嗣馬單旃もまた、單一族の構成員であろう。
- (12) 拙著『周代國制の研究』（汲古書院、二〇〇二年。以下、拙著）第Ⅲ部・第一章・第二節「稱謂のヴァリエーション」を参照のこと。
- (13) 池澤優『孝』の思想の宗教學的研究——古代中國における祖先崇拜の思想的發展（東京大學出版會、二〇〇二年）第二章「西周春秋時代の孝と祖先崇拜」は、史牆盤銘にみえる高祖・刺祖・亞祖の稱號について、高祖を最大限の出自集團（maximum lineage）の始祖、刺祖をそこから

わかれた大分節 (major segment) の始祖、そして亞祖をその下の分節 (minor segment) の始祖とする見解を示している。この見解に従えば、單叔家が單伯家から分節するのは迷の皇亞祖懿仲の代と考えてよいかもしれない。

- (14) 單關係器にはほかに、單子伯盨(四四・二四)・單子伯盨(一〇〇七〇)がある。『集成』は盨を春秋早期、盤を西周早期(『殷周金文集成釋文』(香港中文大學中國文化研究所、二〇〇一年)はこれを西周中期に改めている)に斷定するが、春秋時代の單子の存在から考えても、さほど時代はさかのほらないだろう。また北京市房山縣琉璃河二五一號墓から出土した缶を『集成』は單子缶(五一九五)として著録するが、その字は「單」と讀めない。

- (15) 李學勤「論美澳收藏的幾件商周文物」(『文物』一九七九一一二)「維多利亞美術館這件方鼎、造型最接近『商周彝器通考』一二六方鼎、與洛陽馬坡出土的幾件作冊大方鼎也相類似。鼎腹較淺、是它們的共同特征。作冊大方鼎爲周康王・昭王時器、這件叔方鼎的時代應該相同。這樣看來、鼎銘中的單公很可能是成王的少子臻、也就是第一代的單公。」
- (16) 陳槃「不見于春秋大事表之春秋方國稿」貳拾、單條に「或云成王幼子臻、未詳所本。……案……成王子臻之說已見姓纂、……若單子之有分族于周、則單子自道之矣。成王幼子之說、則存疑可耳」という。『元和姓纂』上平聲・二十五寒條に「單、周成王封少子臻于單邑、爲甸內侯、因氏焉」とある。

- (17) 董珊「略論西周單氏家族窖藏青銅器銘文」(『中國歷史文

物』二〇〇三―四)、朱鳳瀚「陝西省眉縣楊家村出土的遼器と西周貴族の家族形態」(『中國寶展圖錄』、東京國立博物館・朝日新聞社、二〇〇四年)など。

- (18) 王璋「單氏家族銅器群」(『文物』二〇〇三―六)、同「高祖」考」(『文物』二〇〇三―九)、あるいは朱鳳瀚「陝西省眉縣楊家村出土の遼器と西周貴族の家族形態」(前掲)などは、第二代の「皇高祖公叔」を「先高祖公叔」と釋讀している。しかしながら、拓本の觀察ならびに展覽會での實見によっても、これを「皇高祖公叔」と讀むことは間違いない。

- (19) 高祖の事例ではないが、同一人物の作器にかかる叔向父禹盨「朕が皇祖幽大叔の隣盨を作る」(四二四二・III B)と、禹鼎「丕顯にして起々たる皇祖穆公、克く先王を來召し、四方を奠めたまえり。ここに武公もまた朕が聖祖考幽大叔・懿叔を遐忘したまわず」(二八三三―三四・III B)とでは、「皇祖」號が附與される祖先が異なっている。しかしながら、叔向父禹盨銘で「皇祖」と記された幽大叔が禹鼎銘では「聖祖」とされるように、同一の稱號を複数の祖先に與えることは回避されている。師盞鐘「師盞自ら朕が皇祖大公・庸公・□公・魯仲・□伯・孝公・朕が刺考……師鐘を作る」(扶風巨良海家出土大型爬龍等青銅器)『文物』一九九四―一)に列擧される祖先名についても、「皇祖」號がすべての祖先にかけられていると考える必要はないだろう。

- (20) 皇高祖の「皇」字は、天上の神格を指す「皇天」や「皇

上帝」「皇帝」、あるいは周王を指す「皇王」のように、その至高性を示す文字である。

- (21) 張光裕「讀西周速器銘文札記」(『雪齋學術論文二集』藝文印書館、二〇〇四年)は、別に二器の傳世品があるとするが、確認できない。

- (22) 四十二年速鼎や四十三年速鼎では、速の名は虞速と表記される。速は山林藪澤を管轄する虞職を帯びており、そのために「四方の虞・林」が職掌として指示されるのである。

- (23) 同時期の青銅器群としては、ほかに、大克鼎(九三・一センチ、二〇一・五キロ)・小克鼎(第一器・五六・五センチ、四七・九キロ、第二器・三四・二センチ、第三器・三五・四センチ、第四器・三五・二センチ、第五器・不明、第六器・二九・五センチ、第七器・不明)・善夫克盃(一九・九センチ)・克鐘(第一器・三五・九センチ、第二器・五四・五センチ、第三器・三〇・七センチ、第四器・不明、第五器・不明)・克罍(六三・五センチ、三八・三キロ)などからなる克關係器や、周皇帝關係器などが知られている。

- (24) 四十二年速鼎、「余ははじめて長父を建て、楊に俟たらしめ、余は汝に命じて長父を奠めしむ。休にして汝克くその自を奠め、汝これ克く乃が先祖考に型り、獵狁に□し、出でて井阿に曆□に捷つ。汝、戎に戮らず、汝、長父を□し、以て戎を追博し、乃ち即きて弓谷に宥伐す。汝、執訊獲讖し、器・車馬を俘る」には、速が楊に封建された長父をたすけ、獵狁を征討したことが記されている。なお、楊

への封建については、『新唐書』宰相世系表一下「楊氏出自姬姓、周宣王子尚父封爲楊侯」や『元和姓纂』下平聲・十陽條「一云、周宣王曾孫封楊、爲管所滅」といった傳承があることを、李學勤「眉縣楊家村新出青銅器研究」(『文物』二〇〇三・一六)が紹介している。

- (25) 白川靜『詩經研究通論篇』(朋友書店、一九八一年。のち白川靜著作集第十卷『詩經Ⅱ』平凡社、二〇〇〇年に再録)第八章「雅頌詩篇の展開」は、「文武受命の一事に、王朝の絶對性を根據づけようとする雅頌諸篇」が西周後期に成立したと指摘する。

- (26) 『古本竹書紀年』(以下、『竹書紀年』)は武王の克殷から幽王の滅亡までを二五七年と傳えている。速は宣王四三年の紀時をもつ鼎を作っているため、その年に死亡したとしても、宣王の治世は残り三年、さらに幽王の治世一年で滅亡に至る。速の皇高祖單公が「仕えた」と主張する文王の治世を假に宣王三年・幽王一年とほぼ相殺するものとすれば、速一族の世代平均年数は約三年になる。成王と康王を一組とし、速の皇高祖をさらに一人「節約」したとすれば、世代平均年数は約三年となる。かなり大きな数字だが、必ずしもありえないものではないこと、吉本道雅「先秦王侯系譜考」(『立命館文學』第五六五號、二〇〇〇年)を参照。

- (27) 唐蘭「作册令尊及作册令彝銘文考釋」(『國立北京大學國學季刊』四卷一期、一九三四年。のち『唐蘭先生金文論集』紫禁城出版社、一九九五年に再録)。王國維「明堂廟

- 寢通考」(『觀堂集林』)にもまた、康宮が康王の廟であるとの指摘がある。
- (28) 郭沫若『兩周金文辭大系圖錄攷釋』(增訂新版、一九五七年) 令彝條。
- (29) 陳夢家『西周銅器斷代』(二) 一九九令方彝(『考古學報』第十冊、一九五五年。のち陳夢家著作集『西周銅器斷代上冊』中華書局、二〇〇四年に再録)。ただし、その論證の一つとして「在西周金文中有一通例、即『王才』文語不是王在某地、便是王在某宮・某寢……、從無『王才某廟』的」とあったものが、中華書局本では「在西周金文中有一通例、……。南宮柳鼎有『王才康廟』、但此爲王在康廟册命、非王居于康廟」と改められている。
- (30) 『考古學報』一九六二—一。のち『唐蘭先生金文論集』(前掲)に再録。唐蘭『論周昭王時代的青銅器銘刻』(『古文字研究』第二輯、一九八〇年。のち『唐蘭先生金文論集』に再録)下編にも、「康宮問題」に關する言及がある。
- (31) 劉正『金文中の廟制に關する研究の一般的な見解と問題點』(『中國思想における身體・自然・信仰』東方書店、二〇〇四年)に「康宮問題」についての學説が紹介されている。杜勇・沈長雲『金文斷代方法探微』(人民出版社、二〇〇二年)もまた、この「康宮問題」に一章を割いている。
- (32) たとえば、劉正『金文廟制研究』(中國社會科學出版社、二〇〇四年)には、「不少學者曾把『僾宮』釋爲『夷宮』、此說或可成立。但目前爲止、還沒有有力證證明此說」とあるように、「康宮問題」は決定的な史料に缺けていた。
- (33) 拙稿「吳虎鼎銘考釋——西周後期、宣王朝の實像を求めて」(『史窗』第六二號、二〇〇四年)。
- (34) 拙著第一部・第二章・第二節「周王朝の『都』」を参照のこと。
- (35) 吉本道雅『西周紀年考』(『立命館文學』第五八六號、二〇〇四年)は、厲王期に康僾宮(康宮僾宮)・康穆宮もしくは康宮の僾大室・穆大室が出現し、宣王期に康宮僾宮のほか、康昭宮・康刺宮が出現するとする。
- (36) 拙稿「吳虎鼎銘考釋——西周後期、宣王朝の實像を求めて」(前掲)。
- (37) 『春秋左氏傳』隱公十年の「以王命討不庭」のように、文獻史料では「不庭」と表記される。
- (38) 聖盪(四四六九)・戎生鐘(『近出』二七—三四)・秦公簋(四三一五・春秋ⅡB)・秦公盨(二二七〇)にも「不廷」あるいは「不廷方」の語彙がみえる。
- (39) 拙稿「吳虎鼎銘考釋——西周後期、宣王朝の實像を求めて」(前掲)。
- (40) 『史記』周本紀は『尚書』諸篇をふまえて、「成王少、周初定天下、周公恐諸侯畔周、公乃攝行政當國。管叔・蔡叔羣弟疑周公、與武庚作亂、畔周。周公奉成王命、伐誅武庚・管叔、放蔡叔。以微子開代殷後、國於宋。頗收殷餘民、以封武王少弟封爲衛康叔。……初、管・蔡畔周、周公討之、三年而畢定、故初作大誥、次作微子之命、次歸禾、次嘉禾、次康誥・酒誥・梓材。……召公爲保、周公爲師、東伐淮夷、殘奄、遷其君薄姑。成王自奄歸、在宗周、作多方」と記す。

- (41) 『詩經』商頌・殷武「昔有成湯、自彼氏羌、莫敢不來享、莫敢不來王、曰商是常」の「不來享」がこれに相當する。
- (42) 大孟鼎銘「武王に在りては、文の作せし邦を嗣ぎ」のように、「周邦」とは文王にかけて語られる周王朝そのものを指している。「四方」は「萬邦」からなり、「周邦」はその一つである。
- (43) 白川靜「金文補釋」(『金文通釋』第五〇輯、一九七九年)のち白川靜著作集・別卷『金文通釋六』平凡社、二〇〇五年)一五史牆盤は、この「億疆」の「疆」字を「疆索」の「疆」、すなわち綱紀の意に解釋している。しかしながら、青銅器銘にみえる「疆」字の用例は、「萬年無疆」といった煥辭を除けば、すべて土地の疆界を意味するものに限られる。
- (44) 青銅器銘にみえる鹵獲の一覽は、拙著第一部・第一章・第二節「わが心は四方におよぶ」に示した。
- (45) 尹盛平「西周微氏家族青銅器群研究」(前掲)を参照。
- (46) 作冊鬯尊/卣「これ十又九年、王、斤に在り、王姜、作冊鬯に命じ、夷伯を安んぜしむ」(五九八九・I B / 五四〇七・I B)。
- (47) 趙尊/卣「これ十又三月辛卯、王、斤に在り、趙に采を賜う」(五九九二・I B / 五四〇二・I B)。
- (48) 大孟鼎は「人鬲の馭より庶人に至る六百又五十又九夫を賜う。夷鬲王臣十又三伯、人鬲千又五十夫を賜う」という人氏・隸屬民の賜與があつたことを記録している。宜侯矢簋「宜に在る王人、□又七姓を賜う。鄭の七伯、厥の鬲□又五十夫を賜う。宜の庶人六百又□六夫を賜う」にも同じような賜與が記録されているように、この時期、大量の人氏・隸屬民の賜與があつた。
- (49) 王朝秩序については、拙著第一部・第一章「周の領域とその支配」を参照のこと。
- (50) 周王の親征の一覽は、拙著第一部・第一章・第二節「わが心は四方におよぶ」に示した。
- (51) それぞれの關係器で、その軍事活動に言及するものを示せば、伯懋父・小臣誥簋「東夷大いに反き、伯懋父、殷八自を以て、東夷を征す」(四三三八—三九・II A)・呂行壺「伯懋父北征し、これ還る」(九六八九)。伯辟父・競卣「これ伯辟父、成自を以て東命に即き、南夷に成る」(五四二五・II B)。伯雍父(師雍父)・禹鬲「師雍父成りて、古自に在り」(九四八・II)・禹鼎「師雍父、道を省し、隸に至る」(二七二二・II B)・泉簋「伯雍父來るに隸よりす」(四二二二・II B)・稽卣「稽、師雍父に従い、古自に成る」(五四一一)・泉或卣「王、或に命じて曰く、ああ、淮夷敢えて内國を伐つ、汝それ成周師氏を以、古自に成れ、伯雍父、泉の曆を蔑す」(五四一九—二〇・II B)・冏尊「冏、師雍父に従い、古自に成るの年」(六〇〇八)となる。白川靜『西周史略』第三章・一「康昭期の南征」(『金文通釋』第四六輯、一九七七年)のち白川靜著作集・別卷『金文通釋六』平凡社、二〇〇五年)を参照のこと。なお、白川氏は宗周鐘を昭王自作器とする立場を堅持するが、これは厲王自作器と考えるべきである。

- (52) 明公尊の作器者明公は、成周の康宮に言及する令方尊／方彝に登場していた「周公の子明保・明公」と同一人物と考えられる。
- (53) 文王・武王の事績について迷盤銘は「殷を撻ち、天の魯命を膺受し、四方を匍有せり」と記すが、これは文王の事績「天の魯命を膺受し」と武王の事績「殷を撻ち」「四方を匍有せり」を合わせたものである。
- (54) 李學勤「戎生編鐘論釋」(『文物』一九九九—一九九〇)。
- (55) 「周邦に成る有り(有成于周邦)」は「有成事」あるいは「有爵于周邦」という表現に類似しており、臣下の勳功を指し示すことばであると考えられる。
- (56) 最近のものとしては、小南一郎「西周王朝の成周經營」(『中國文明の形成』朋友書店、二〇〇五年)に、このことについての指摘がある。
- (57) 拙著第Ⅱ部・第二章「西周の官制」を参照のこと。
- (58) 貝塚茂樹「中國古代史學的發展」(弘文堂、一九四六年)のち貝塚茂樹著作集第四卷、中央公論社、一九七七年に再録。
- (59) 『國語』魯語下には「周恭王能庇昭・穆之闕而爲恭、楚恭王能知其過而爲恭」という閔馬父の發言が記されているが、それは共王(恭王)の具體的な事績の記憶に結びついているとはいいがたい。
- (60) 周本紀以外では、秦本紀「非子居大丘、好馬及畜、善養息之。犬丘人言之周孝王、孝王召使主馬于汧渭之間」、齊太公世家「哀公時、紀侯譜之周、周烹哀公而立其弟靜、是爲胡公。胡公徙都薄姑、而當周夷王之時」、衛康叔世家「頃侯厚賂周夷王、夷王命衛爲侯」、楚世家「當周夷王之時、王室微、諸侯或不朝、相伐。熊渠甚得江漢間民和、乃興兵伐庸・楊粵、至于郢」の記事が遺されている。齊太公世家の「周烹哀公」は『竹書紀年』の記事と同じ内容を傳えているが、その他は諸侯在位などの指標として周王が言及されるだけである。
- (61) 康宮諸宮に共王・懿王・孝王の宮廟がみえず、夷王(僖王)の宮廟がみえるのは、あるいはこのことと關係するのかもしれない。ちなみに、迷盤銘は迷の皇考共叔が「仕えた」厲王の事績についても沈黙している。厲王の事績を語ることは、ただちにその暴虐・奔競を想起させることになるだろうから、一族の勳功を誇ろうとする盤銘は、その事績について何も書きえなかつたものと思われる。
- (62) 沈長雲「論周康王」(『西周史論文集 下』陝西歷史博物館、一九九三年)・同「論成康時代和成康時代的銅器銘刻」(『中原文物』一九九七—二〇〇〇)は、康王に關する文獻史料と金文史料の相異を問題にしている。
- (63) 『荀子』大略篇「文王誅四、武王誅二、周公卒業、至成・康、則案無誅已」もまた成王・康王期の安寧をいう。
- (64) 『國語』周語下「自后稷以來寧亂、及文・武・成・康而僅克安民。自后稷之始基靖民、十五王而文始平之、十八王而康克安之」も同様であろう。
- (64) 成王の洛邑(成周)建設は、『尚書』召誥・洛誥や『逸周書』度邑解などに記録されている。矧尊銘は成周建設を

傳える青銅器銘として貴重であるが、ここでは周建設計が武王の遺志であることが強調されている。伊藤道治「周武王と雒邑——刳尊銘と『逸周書』度邑」(『内田吟風博士頌壽記念東洋史論集』一九七八年。のち『中國古代國家の支配構造』中央公論社、一九八七年に改訂・再録)を参照のこと。武王と成王を一組とする言説は宜侯矢簋銘にもみえていたが、ほかに林斷代I Bの作册大方鼎「公東 武王・成王の裸鼎を鑄る」といった事例がある。かつて、成王は武王と統言される王であったが、西周の中頃から文王・武王統言の言説が優勢となり、かつ康王「獨尊」が認められた結果、成王は孤立した王となってしまう。周の東遷は、周人たちがその成王の記憶を再確認する契機となっただろう。

(65) 『國語』周語下に「叔向告之曰、……且其語說昊天有成命、頌之盛德也。其詩曰、……、是道成王之德也。成王能明文昭、能定武烈者也」とある。鄭箋は「文王・武王受其業、施行道德、成此王功」と解釋し、成王への言及を認めないが、『詩集傳』「二后、文・武也。成王、名誦、武王之子也」に従うべきである。

(66) 『詩集傳』「此祭武王・成王・康王之詩。競、強也。言武王持其自強不息之心、故其功烈之盛、天下莫得而競、豈不顯哉。成王・康王之德、亦上帝之所君也。……自彼成康、用彼成安之道也」と解釋し、鄭箋はこれを「不顯乎其成安祖考之道、言其又顯也。……武王用成安祖考之道、故受命伐紂、定天

下爲周」と敷衍する。

(67) 松本雅明『詩經諸篇の成立に關する研究』(東洋文庫、一九五八年。のち松本雅明著作集(五)(六)、弘生書林、一九八六年)、白川靜『詩經研究通論篇』(前掲)。

(68) 『史記』三代世表。『春秋左氏傳』昭公十二年「昔、我先王熊繹、與呂伋・王孫牟・燮父・禽父並事康王」という記事を、『史記』楚世家は成王の時代にかけて「熊繹當周成王之時、舉文・武勤勞之後嗣、而封熊繹於楚蠻、封以子男之田、姓聿氏、居丹陽」と記す。吉本道雅「先秦王侯系譜考」(前掲)・「古代中國の系譜を讀み解く」(『古代王權の誕生』角川書店、二〇〇三年)を参照。

(69) 『後漢書』西羌傳は『竹書紀年』に據りつつ、王季の征討活動を數多く記している。注に引かれた『竹書紀年』を挙げれば、「武乙三十五年、周王季伐西落鬼戎、俘二十翟王」のほか、「太丁二年、周人伐燕京之戎、周師大敗」「太丁四年、周人伐余無之戎、克之。周王季命爲股牧師也」「太丁七年、周人伐始呼之戎、克之。十一年、周人伐翳徒之戎、捷其三大夫」となり、王季の時代に「西落鬼戎」以外にも數多くの軍事活動があったことになる。

(70) 吉本道雅「西周紀年考」(前掲)は、『竹書紀年』「周昭王十九年、……喪六師於漢」の記事が、康王在位一九年の斥地での活動の訛傳であろうと考えている。斥地の比定については諸説あり、かつ采土の賜與や夷伯の安撫といった斥地での事績とも一致しないが、あるいは「十九年」の記憶はそうであるかもしれない。

(71) 畢命本文は漢代には傳わらず、現行本畢命は偽古文である。現行本書序には「康王命作冊畢、分居里、成周郊、作畢命」とあり、『史記』周本紀とは少し異なっている。

(72) たとえば、周南・關雎についての魯詩説「周衰而詩作、蓋康王時也。康王德缺於房、大臣刺晏、故詩作」の言説は後代に引き繼がれていく。

THE RECALLED HISTORY OF THE WESTERN ZHOU: DECIPHERING THE INSCRIPTION OF LAI PAN

MATSUI Yoshinori

The Lai pan 逯盤, a bronze vessel, discovered in January, 2003 in Yangjia village 楊家村 in Meixian county 眉縣, Shanxi 陝西 records the exploits of twelve monarchs across eleven generations, i.e., kings Wen 文王, Wu 武王, Cheng 成王, Kang 康王, Zhao 昭王, Mu 穆王, Gong 共王, Yi 懿王, Xiao 孝王, Yi 夷王, Li 厲王, and King Xuan 宣王 who was served by Lai. When combined with the Shi-Qiang pan 史牆盤, a vessel, which refers to the reigns from King Wen to King Gong, it is possible to confirm the orthodox lineage of the kings of the Western Zhou by inscriptions on bronze vessels.

The Lai pan highlights the service of the Shan clan 單氏 to the kings of Zhou since Shangong 單公, who had served King Wen and King Wu. However, this assertion is nothing other than the reuse of the claims of the late Western Zhou that recounted the founding of the dynasty by taking Wen and Wu as a single unit. The large size of the group of bronze pieces left by Lai (12 three-legged basins 鼎, 1 four-legged pot 盃, 1 shallow vessel 盤, and 4 bells 鐘) and the inscriptions on them do indicate the influential Lai did serve the court of King Xuan, but the attempt to link his ancestors to the memory of the founders of the dynasty was meant to garner prestige and authority. As a result of extending the family lineage back to the period of the founding of the dynasty, he mimicked the joint record of kings Wen and Wu, and combined King Zhao and Mu, and then King Gong and Yi 懿王, and Xiao and Yi 夷王 on the Lai pan so that each would correspond with one of his ancestors in order to disguise the contradiction with the actual lineage.

Despite this fact, King Cheng and King Kang are not combined in the Lai pan inscription. Each is treated as a separate king corresponding to one of the Lai ancestors. Tang Lan 唐蘭 has previously proposed that the Kang gong 康宮 inscribed on the bronze vessels referred to the mausoleum of King Kang and argued that the Kang gong occupied the leading position among the mausoleums of the kings of Zhou, but because the inscription on the Lai pan does not attempt to combine the two kings, it may be supposed that this is somehow related to the Kang gong's special position. However, this special position of the Kang gong cannot be confirmed immediately after the death of King Kang. Confirmation of

such a position can be confirmed only after the ruling order of the dynasty was shaken, when revolts occurred successively in the reigns of King Li and Xuan and when the full-fledged foreign campaigns of King Kang's reign were viewed in hindsight. The inscription on the Lai pan vessel reflects the historical consciousness of the later Western Zhou. The joint record of the foreign expeditions of Kings Zhao and Mu and the silence on the exploits of kings Gong, Yi 懿王, Xiao, and Yi 夷王 were carried on in the later historical sources.

MILITARY CEREMONIALS AND SOCIAL ORDER IN THE PERIOD OF UPHEAVAL BETWEEN THE TANG AND SONG DYNASTIES

MARUHASHI Mitsuhiro

This study focuses on military ceremonials, and in particular the imperial hunt 田獵 and military drills 講武, in analyzing how social order was meditated by military affairs in the period of upheaval between the Tang and Song dynasties.

In the early period of the Tang dynasty the emperor, foreign embassies, leading civilian and military officials, soldiers and ordinary citizens would all assemble for the imperial hunting expeditions and ceremonial military drills. These assemblies served as representations of the Tang imperial order. The participants would follow a program prescribed in the classics and jointly conduct military exercises. They would thereby confirm their individual places in the imperial order. Moreover, in the case of the imperial hunt, a portion of the game that had been caught during the hunt was shared by the participants in a communal meal, and another portion was used as an offering at the tomb of the imperial ancestors. This practice also emphasized the unity of the entire empire, including the imperial ancestors.

Military ceremonials, however, changed greatly as time passed. In the case of the imperial hunt, the practice of the emperor and his subjects exchanging the game taken and other items spread during the late Tang. Then in the Sung, the practice of offering game to the imperial tomb itself died out. In short, the fact that the fruits of this military training were shared in a reciprocal, quid pro quo, manner by sovereign and subject rather than shared communally among the members of the empire, was important as a turning point in the mediation between the two.

A similar phenomenon occurred in the case of military drills. In other words,